

解釋と鑑賞別冊

現代文学講座

昭和49年11月1日発行(毎月1日発行)第1号 昭和49年9月10日国鉄首都特別承認雑誌第1932号

昭和の文学Ⅰ

編集／紅野敏郎・竹盛天雄・分銅惇作・三好行雄



- 昭和文学における「政治と文学」
- 二十世紀西欧の受容と変質
- 川端の文学世界
- 転向と転向文学



- 昭和文学の正と負
- 「私小説論」前後
- 岸田国士におけるドラマの近代
- 日本浪漫派の再評価



Nov.

1912

現代文学講座 5

昭和の文学——I

1926

明治の文学Ⅰ

明治の文学Ⅱ

明治の文学Ⅲ

大正の文学

昭和の文学Ⅰ

昭和の文学Ⅱ

現代の詩歌

文学史の諸問題

は し が き

たとえば国文科の卒業論文における、いささか比重を失した近代（現代）への傾斜は早くからいわれてきたことだが、この傾向は最近いっそう顕著になりつつある。手放しでよろこべる事態かどうかは別にして、一般に近代文学（現代文学）への関心がとみに強まってきたことは否定できない。それに対応して、近代文学を対象とする研究もまたいちだんと活発化してきた。研究人口の増加や研究対象の拡大などといった現象面だけのことでなく、戦後に本格化した研究もすでに四半世紀以上を閲して、実証と論理の両面にわたる幾多のすぐれた業績があいついで提示されている。方法論や文学史についての自覚も深化し、日本の近代文学史を体系化する史観や評価基準を、文学史の動態の内部に求めねばならぬとの要請も具体化を迫られはじめてきた。研究の多様化・重層化にともなう不可避の混乱もまた認めておかねばならないが、総じて、最近の近代文学研究の進展はまことにめざましいといつてよいだろう。近代文学自体が単に歴史的時間に封じられた文化遺産としてだけでなく、現代の文学がそこに糧を仰いだ伝統としての重い意味を、ようやく明瞭にしてきた。このことは研究者サイドでの研究が深化したこととあわせて、小説家や批評家の側からの近代文学へのアプローチがめだちは

じめたことでも裏付られよう。

本講座はそうした状況を背景に、刻下の近代文学研究がひとつの曲り角にさしかかっているとの認識のもとに、研究史に新しい展望をひらくためのささやかな道標として編まれた。もとより通史や概説を意図していない。いわば問題史、もしくは史論的な追尋をころざしたもので、さまざまな思潮や作家や作品について、各論者に自由な角度からの論稿を寄せていただいた。編者の意を用いたのは、所定の主題にもっとも適切な執筆者の協力を仰ぎたいということであつたが、幸いに、多くのすぐれた研究者や批評家の参加を得て、所期以上の成果をあげることができた。われわれのもっとも喜びとするところである。協力を惜しまれなかつた方々に厚く感謝の意を表するとともに、種々の事情で刊行のおくれたことを御詫びしたい。なお編集の意図に賛同して出版の労を執られた至文堂の各位にもお礼を申し上げる。

昭和四十九年六月

紅野敏郎
竹盛天雄
分銅惇作
三好行雄

目次

現代文学講座第5卷

昭和文学における「政治と文学」ナロレタリア文学
における「政治」 祖父江昭二 5

二十世紀西欧の受容と変質方法的
仮説 千葉宣一 33

川端の文学世界 羽鳥徹哉 58

転向と転向文学 満田郁夫 87

昭和文学の正と負評価の基軸を
めぐって 磯貝英夫 113

「私小説論」前後 吉田熙生 141

岸田国士におけるドラマの近代 菅井幸雄 167

日本浪漫派の再評価 神谷忠孝 195

昭和文学における「政治と文学」

——プロレタリア文学における「政治」——

祖父江 昭二

はじめぼくに与えられた題目は「昭和文学における政治と文学」というのであった。このやや熟していないことばをあえて使ったところに独自のねらいがあるのかと思われ、問い合せてみると、たしかに「……文学における……文学」はおかしく、「昭和における政治と文学」でよいのだという答えが返ってきた。しかしはじめに与えられた題目がはらんでいたと思われる意図をこちらで推測するなら、それは、「文学」あるいは「文学史」に固執し、それゆえ「昭和」ではなくどこまでも「昭和文学」——というカテゴリーの是非はいまさておき——に焦点を定めながら、そこでの「政治と文学」を問題にしてほしい、ということであつたのだろう。

そう受けとめ、「政治と文学」という問題視角で「昭和文学」を展望すると、そこには、たしかにそれぞれ「政治と文学」と規定づけることはできるが、しかし内実が違って、むしろ分けて考えた方が自然であるような文学現実群が存在している。ごく大まかに類別化してみると、そのひとつは、一九二〇年代から三〇年代前半にわたってくりひろげられた、いわゆるプロレタリア文学とその運動にかか

わる「政治と文学」問題。つぎに、そのプロレタリア文学運動をも含めた革命運動が敗退する過程で生まれた「転向」をめぐるの「政治と文学」的文学現実。三番目に、外に向っては侵略戦争を拡大し、内に対しては弾圧を強めた時代にあったの、たとえば「戦争文学」をその代表例とするような、問題的な文学現実。むろんこうしたそれぞれの文学現実・動向に対する同調・反発そして沈黙もまた「政治と文学」の諸相をかたちづくる。さらに「昭和文学」としての「戦後」もまた、よく知られているように、「政治と文学」をめぐるの論争で出発した。そしてその後も……ということになる。

段階を異にするこれらすべての動向、その諸相・問題を論ずることを、あの題目は含意しているし、またそれら全体をつらぬくものとして、つまり「昭和文学」の特質として「政治と文学」問題を措定するという作業も、その当否は別として、ありうろと考える。だが、この講座の『昭和の文学』のなかにはたとえば「転向と転向文学」とか「戦争と文学」といった項目もあり、おそらくぼくに課せられているのは、その総論あるいは序説ではなくて、実際はプロレタリア文学を対象とする一文のようである。それゆえ、以下、そういう限定を課しておきたい。

いまひとつ、「政治と文学」とはいったいなにかという問題。このことば——ひいては問題のたて方——を好むひとの論のなかには、つきつめると、非人間的な政治と人間的な文学との対抗という把握がしばしば見られる。そこからまた、人間的な政治を目指すの前衛政党さえもが犯す悪に対す

る、人間的な文学者の戦いといったことが主たる表象となっている問題理解が出てくる。しかしほくはそういう発想や理解・把握による「政治と文学」問題への接近には賛成できない。それと言うのも、前衛政党が悪を犯すはずはないという認識あるいは信念を持っているからではまったくない。ではなくて、ただそういう問題的事態は、ひとり文学者だけではなく、だれもに、その解決への努力が課せられている問題、つまり極言すれば政治の問題であって、「政治と文学」の問題ではないと思うからに過ぎない。たとえば「言論・表現の自由」の問題は、たいへん重要な問題ではあるが、けっして文学者だけの問題ではなく、国民全体の問題ではないのか、という理解・論理と、それは共通する、と言いたいまでである。

むろんプロレタリア文学における「政治と文学」問題の実体は多様な側面を持っており、プロレタリア文学者と前衛政党との関係という問題もそのひとつの重要な側面であったことを否定するつもりはない。しかしプロレタリア文学への接近を、運動批判つまり運動史論に解消しないで、しかもそれらの論点を切捨てず、かえってそれらを消化し切った文学論、つまりすべてが文学あるいは文学史のところに凝縮するような論として試みたいという志向をいだくかぎり、「政治と文学」問題を表象したとき、なによりもまず浮び上がってくるのは、文学者あるいはその組織の政治参加の問題ではなく、文学そのものが革命という政治にどうかかわったかという問題である、とぼくには思われる。

こうした点についてはかつてふれたこともあり（拙稿「政治と文学（マルクス主義文学運動の問題点）」『講座・日本文学の争点・6』昭和四四・五）、説明不足は承知しているが、そう理解した上で、ここではさらに論点を限定し、プロレタリア文学にあっては、「政治」はどういうものとして表象され、どのように描かれているか、という点にしぼり、以下ペンを進めることにする。

一

よく知られているように、プロレタリア文学運動の最盛期と言ってよいころ、平林初之輔の問題提起にはじまり、芸術的価値と政治的価値との関係をめぐってはげしく論争が交され、それ自体、「政治と文学」問題の一面面をかたちづかった。その論争のなかで、「芸術に政治的価値なんてものではない」（『新潮』昭和四・一〇）と言いきったプロレタリア文学者中野重治は、「政治とは何ぞや？」と問い、「政治といふのは、生産手段独占のためにある階級によつてなされた物や人間の階級的対抗的配置であり、そこから生れて来る強力を意味することになる。〔国家〕とか何とか呼ばれる権力がそれだ」（「内伏字」と書き、それゆえまた、「この（権力の——祖父江）〔奪取〕のための闘争、生産手段独占のため現在階級的対抗的に置かれてるアパライトの編成替へが政治的闘争なのだ」とも規定した。とくにきわだった主張ではなく、むしろそれが当時のプロレタリア文学者ないしはその理論的作

物に共通する最大公約数的な「政治」把握であった。現に、「マルクス主義文、学、理、論の再吟味」（傍点祖父江）を提起した論争相手の平林にしてからが、「マルクス主義の一般的理論の真実性を認めた上で」、こう書いている、「マルクス主義は一の世界観であるけれども、最もさしせまつた目的としては、組織されたプロレタリアによるブルジョア政權の奪取といふ政治の一点に、プロレタリアの凡ての力が集中されることを要求する」（『政治的価値と芸術的価値』『新潮』昭和四・三）と。

明らかに、あの石川啄木、「敵」としての「国家」を「強権」とおさえた「時代閉塞の現状」（明治四三）の啄木に一直線につながっていると言えなくもない。しかし日本マルクス主義の寄与はこの「国家」としての「政治」を人びとに意識させたところにあつたのではなかった。少なくともそこに限定することはできない。むしろマルクス主義によって人びとが新たに発見し、意識させられたのは問題としての「社会」であり、「社会」という「政治」であつた（『社会問題』という成語の流通や社会、科学が即マルクス主義理論であつたという特徴的な現実がこれを傍証しよう）。この点で昭和期の政治青年は明治期の政治青年とは違っている。むしろその「社会」は内部に階級対立をはらむ社会であり、漠とした世の中とは違つていた。それゆえ、あの中野らの規定に見られるように、一方で「権力」「政權」という表象があると同時に、他方、その「奪取」「アパライトの編成替へ」という、運動としての「政治」、「社会」としての「政治」が、それと不可分の関係をもつて表象されているの

である。

しかしこの「社会」把握には問題があった。簡単に言えば、資本主義対社会主義、ブルジョア対プロレタリア、ブルジョア思想対プロレタリア思想、ブルジョア個人主義対プロレタリア集団主義という対抗的な把握の脈絡のなかで、個人対社会とおさえる、つまり個人と対立し、その否定の上に成り立つ「社会」が、支配的なかれらの「社会」表象であった。たとえば、代表的な評論、蔵原惟人の「プロレタリア・レアリズムへの道」(『戦旗』昭和三・五)では、こういうふうに論理がはこばれていく、「個人主義こそはブルジョアジーの……決定的原則であつた」、「彼等(『近代的レアリズム』の文学者へればブルジョア・レアリズム)、つまり「近代的ブルジョアジーの文学である自然主義」の文学者たち——祖父江)の生活——現実に対する認識の態度があくまで非社会的、個人的である」、「彼等(同上——祖父江)が自然科学者の客観性を自らに要求して居ながら社会科学者の客観性を有してゐなかつた」、「プロレタリア作家はこの自然科学的レアリズムを克服して個人的に對するに社会的観点を獲得しなければならない」、「何よりも先づ明確なる階級観点を獲得しなければならない」と。

さらに、この蔵原文に刺激を受けて、あの「三・一五」という政治的事件を描いた小林多喜二は、その作品「一九二八年三月十五日」(『戦旗』昭和三・一一、一二)についての蔵原の批評、「画期的な作品である」と評価した上で「事件」の「背景をなした大衆の運動をほとんど描いていない」点を

「最も大きい欠点」とした蔵原の批評（『プロレタリア文芸の画期的作品』『都新聞』昭和三・一二、引用は『蔵原惟人評論集』）に答えるかのように、次作「蟹工船」（『戦旗』昭和四・五、六）を送稿する際、蔵原宛にこう書いている、「この作には『主人公』と云うものがない。……労働の『集団』が、主人公になっている。その意味で、『一九二八・三・一五』よりも一歩前進していると思っている。／……『集団』を描くことは、プロレタリア文学の開拓しなければならない、道であると思っています」（傍点原文、引用は『定本・小林多喜二全集』第一四巻）と。つまり基本的にはあの「個人対社会」という把握を保持しながら、「大衆」という要素をからませることで、「個人対集団」という把握にたどりついたという一連の脈絡を見てとることができよう。

もっとも「蟹工船」のひとつの文学的課題でもあった、この「個人対集団」という点について、蔵原は、一方では、「作者はこの作において個々切り離された個人をでなくして一つの集団を描こうと努力した。作者のこの努力は全く正しい」と評価しつつ、他方、「しかし集団を描こうとするのあまり、個人がその中に全然埋没してしまう危険がある。……プロレタリア作家は集団を描くために個人を全然埋没してしまつてよいだろうか？ 否。……我々は個人か集団か、というふうに問題を立てるのではなくして、集団の中の個人というふうに問題を立てなければならぬ」（傍点原文、「作品と批評」『東京朝日新聞』昭和四・六、引用は同上）と批判している。たしかにこれは「個人対集団」と

いう把握ではない。

しかし多喜二の小説「一九二八年三月十五日」を批評した、前出の短文「プロレタリア文芸の画期的作品」のなかで蔵原はこう書いている。

我々の見るところでは、この作の最も大きい欠点はその主題の取り扱いそのものの中にある、作者がこのような事件を取り扱いながら、それを全体としての無産者解放運動との連関の中におき得なかったということの中にある。作者はこの「事件」の犠牲になった幾人かの闘士たちの生活と心理とを描いた、そしてそれはしばしば極めて見事に描かれている。しかし作者はその背景をなした大衆の運動をほとんど描いていない。この「事件」の前に大衆がいかに関心していたか、大衆がこの「事件」に対していかなる態度を取ったか、——それは作者によってついに闇の中に残されてしまった。

「事件を……全体としての無産者解放運動との連関の中におき得なかった」点を「この作の最も大きい欠点」としたこの批判は、多喜二自身をしてのちに「事件を『検挙』と『拷問』といふ現象的事実だけに切り離して描いてゐる」（『一九二八年三月十五日』の経験）『プロレタリア文学』昭和七・三）ときびしく反省させるような、そういう性質の批評であった。

しかしその反面、たとえばその第四節の最後のところでこういうふうに描かれている作品を、つまり——

お恵（検挙された闘士小川龍吉の妻——祖父江）は工藤（組合の書記でやはり検挙され、妻のお由と子供たちが残されている——祖父江）の家からの帰り、市の一番賑やかな花園町大通りを歩いてきた。（中略）街には何時ものやうに、沢山の人が歩いてゐたし、鈴をつけた馬櫓、自動車、乗合自動車はしきりなしに往つたり来たりしてゐた。明るい店のショウ・ウインドウに、新婚らしい二人連れが顔を近く寄せて、何か話してゐた。——温かさうなコートや角巻の女、厚い駱駝のオーヴァに身体をフカ／＼と包んだ男、用達しの小僧、大きな空の弁当箱をさげたナツバ服、子供……それ等が皆、肩と肩とを擦り合せ、話合ひ、急ぎ足であつたり、ブラ／＼であつたり、歩いてゐる。お恵は不思議な気持がしてくるのを覚へた。今、この同じ××の市であんなに大きな事件が起き上つてゐる。然し、それと此処は何んといふ無関係であらう。それでいゝのだらうか。あの何十人——何百人かの人達が、全く自分等の身体を投げてかゝつてゐる、誰れでものためでない、無産大衆のためにやつてゐるそのことが、こんなに無関係であつていゝと云ふのだらうか——お恵は分らなくなつた。こゝには、そのちよつびりした余波さへ来てゐない気がした。政府が新聞に差止めしてゐるズルイ方法のためがあつたかも知れない。ずるい方法だ！ 然しどの顔も、そのどの態度も皆明るく、満足し、皆てんでの行先きに急いでゐるやうに思はれた。

夫達は誰のためにやつてゐるのだ。お恵は変に淋しい物足りなさを感じた。夫達がだまされてゐる！ 馬鹿な、何を云ふ！ 然し、暗い気持は馬鹿のやうに、しつこくお恵の身体にまっはつて離れなかつた。

——という描写・叙述を含む、この作品を、「……大衆がこの『事件』に対していかなる態度を取つ

たか、——それは作者によってついに闇の中に残されてしまった」と断定する、そういう側面をはらむ批判でもあったのだ。

この描写・叙述についてはかつてふれたこともあるが（拙稿「プロレタリア文学の展開」『講座・日本文学・11』昭和四四・九）、あきらかにここには、「大衆がこの『事件』に対して」「取った」ある「態度」、それを「無関係」と検挙者の妻が思わざるを得ないような、そういう「態度」が描かれているのではないか。この「無産者大衆のためにやつてゐる」人びとと「大衆」との悲劇的な断絶は、革命にかかわろうとする文学者が政治的にも（むろん文学的にも）もっとも重要な課題のひとつとして自覚的に追求すべき問題であつたらう。むろん「一九二八年三月十五日」は、そのことをテーマにした作品ではない。しかしこういう問題的な現実への問題感覚があればこそ、作者は、「無関係」というかたちでかわる「大衆」の重要な問題側面にふれ得たのであり、またプロレタリア文学ではほとんどとりあげられない、あの検挙者の妻の「淋しい物足りなさ」を描き得たのであろう。

しかし蔵原は、この多喜二の部分的ではあるが貴重な文学的試みを成熟させる方向には批評のペンをふるわず、見てきたように、むしろあれでは「大衆」を描いたことにはならないという判定がそこから引き出されるような批評をした。だからこう言うことができる、「大衆がこの『事件』に対していかなる態度を取ったか」、それを「描いていない」と言うとき、その蔵原の「大衆」表象には、多喜